

式 定 認 産 遺 怪

祝 岩手県遠野市 ! 怪遺産認定!

怪遺産
NEWS

2010年9月26日、「妖怪セミナー in遠野」の2日目。盛り上がる岩手県遠野市にて、世界妖怪協会と『怪』により、遠野市が「第三回怪遺産」に認定された。当日行われた認定式と記者会見では、荒俣宏氏、京極夏彦氏、弊誌編集長の郡司聡より、怪遺産の認定理由、怪遺産の意義、そして遠野市を認定することの意義について熱く語られ、遠野市を代表して市長の本田敏秋氏に、認定証と盾が贈られた。

遠野市の選定理由

郡司 ただ妖怪で町おこしをやっているだけではなく、古くからの妖怪の伝承地であり、それを生かした町づくりに取り組みされていること、そして誰しも一度は行ってみたい憧れの土地でもあるということ。『遠野物語』刊行百周年に際し、その功績を讃えて怪遺産に認定させていただきました。

遠野市に対する怪遺産認定の意義とは

荒俣 遠野市への「怪遺産」認定は、もっと早く行われるべきイベントであったと思います。妖怪に関しての日本人の関心の持ち方は、とても波がありました。柳田國男さんたちが遠野へ来たときには、ちょうど世界的に、妖怪を含めた目に見えない世界への関心が盛り上がっていました。それを受けた日本は、文学者を中心として関心を大いに盛り上げ、そして自然科学のほうからもアプローチをしていた時期でありました。ちょうどそういう時期に『遠野物語』が刊行されたのですが、それ以降は、いろいろな理由、一番大きいのは「迷信だらう」という理由で、そのような考え方をする人たちがだんだん少なくなってきました。

思いますね。これは、熊野や高野山に匹敵する文化だと言ってもいいと思います。今回、遠野の皆さんにこの怪遺産認定を受け取っていただけたというのは、大変に嬉しいことだと思っています。

京極 荒俣さんとは別な観点からひと言申し上げます。私どもは、水木しげる先生を会長に戴く世界妖怪協会の一員であります。これは言うまでもなく「妖怪」が中心にある集まりであります。

さて、その妖怪ですが、その原形となるものはいにしえより連綿と伝えられておる様々な事象であるわけですが、それがわれわれが知る「妖怪」となったのは、そんなに古いことではありません。「妖怪」を作り上げるために必要だった重要な要素のひとつに、民俗学という学問があります。その民俗学を創ったのは、言わずと知れた『遠野物語』の作者・柳田國男の人でありました。

日本民俗学は西洋のフォークロアに比べられる学問ですが、実は少し違っています。国語学者であり農政学者でもあった柳田さんが構想した学問は、当初郷土学と呼ばれていました。その名のとおり私たち日本人

しかし遠野だけは、「遠野物語」という切り札のような資料と宝があったお陰もあり、遠野へ対しての日本人の評価を落とすことがなかったと思いますね。

私が、こういう世界に関心を持った時期はその最悪な時期でありました。学校で叱られました。「お化けの研究をお前はやってるのか、やめなさい」「そういう子に育てた覚えはない」と親からも言われました。でも、そうじゃなかったんです。妖怪を愛したり、妖怪を私たちの生活の中に取り入れたり、発想の中に取り入れたりということとは、大きな意味での成熟の一つの形態だった。柳田さんはそれを早くから理解をしていました。たとえば、子どもがつく嘘などについては、大変関心を持っていましたね。大人が言うと、「嘘をついちゃいけませんよ」ということになるんですけども、じつは嘘は真実のゆがめられた表現なのです。子どもですから、仕方なく嘘という形を語を進展させたんでしょう。柳田さんはそういう裏側の文化までよく知っていました。

妖怪話って、確かに突き詰めれば中身は何もないと思います。でも、何もないからこそ、大き

な社会の文化の形成の土台になってきたというのには、二千年、三千年の歴史を見ればすぐわかる。『遠野古事記』がそれを物語っています。遠野の歴史とほとんど同じリアリティと日常感覚をもって、妖怪の話が書かれていますね。こういうような感覚をどこかで保持をしていかなければいけないというのが、おそらくここ最近のトレンドになってきたと思います。その間まで、遠野は本当によく頑張っていたと思っています。

その意味で、私たちは遠野を非常に高く評価させていただいております。今日も体験をしたんですが、市民の皆さんがそれを楽しく、そして寛大に受け入れているっていうことが重要だと思っんです。こういうような雰囲気を持っている町って、実は残念ながら、これまではほとんどなかった、言ってもいいかもしれません。確かに、町おこしとしてやっているところは最近増えました。でも、遠野のような長い歴史を持つて語り続けてきた場所というのは、おそらくないと思います。

その意味で、この遠野の偉業というのは、日本の中にあっても強調してもし足りないほどだと思えます。まさしく文化遺産だと

の心性に根差した「郷土」を考察する学問であります。ここから生れた民俗学は、日本文化の祖型を求める学問となりました。民俗学は、懐かしい日本の姿を見つめる学問でもあったのです。

ここ遠野と柳田の出会いというのは、柳田民俗学が誕生するずっと前のことなんです。佐々木喜善が語った遠野の話は、「異常心理」と言わしめるほどの強いインスピレーションを柳田國男に与えました。柳田が民俗学を作り上げる過程で、かくあるべき過去の日本の姿を構築する際、この遠野のイメージが強く影響した可能性はあるだろうと僕は思います。私たちが「日本の原風景」として思い浮かべるのは、多く遠野のような風景でしょう。実際、遠野には「日本の原風景」などというキャッチフレーズが付くことがあります。それは当前のことなかもしれませんが、日本の原風景のモデルとなったのがこの遠野であった可能性もあるかもしれないのです。民俗学そのものが、この遠野のイメージを下敷きに組み立てられているのならば、その民俗学を基本にして、われわれの知る「妖怪」のイメージは形成されているのですから、遠野は「妖怪」のふるさとと言ってよいの

かもしれません。そう考えると、ここを怪産として認定しないわけにはいかないですね。

もちろん、遠野以外にも日本中にそれらしい土地はたくさんあります。しかし残念ながら変質してしまっているところが多い。石仏も祠も失われ、建物はなくなり、村は消え、山の形さえ変わってしまっています。そこに住む人が土地に伝わる伝承を聞いたことがないというところも多い。でも、遠野はそうではありません。山も里も村も何百年も前の姿をいまだ残している。そして、そこにきちんと人が生活している。文化や歴史と共存している。昔話をいまでも語り伝えているとか、そういう問題ではなく、現在が過去と一緒に住んでいるんです。こういうケースはなかなか見つかりません。



「ここで狐に化かされたんだ」「うちのじいさんは化け猫にかじられたんだ」みたいな、そういうレベルで、まだちゃんと物語が生きている。これはなかなか珍しいことで。ぜひ、こういう特異な風土という文化、文化というかを、今後の遠野の都市づくり、町づくりを生かしていただきたい、いつまでもこうした形で栄えていただきたい、強く思います。そういう気持ちを持って、怪産の認定をしたということでございます。

怪産認定を受けて

遠野市長本田敏秋 この怪産認定、三万一千人の遠野市民が心から喜んでこの認定をお受けしたいと思っております。

私は遠野が持つ「座敷童子」にしても、あるいは「天狗」にしても、そして「河童」にしても、遠野市民と一緒に生活をするので、遠野の町づくりのエネルギーが導き出されるんじゃないのかなと思っております。

実は、つい一週間ほど前、報道機関がいうところの「限界集落」「消滅集落」に近い集落で敬老会がありました。もう、高齢化率は五〇

%という集落の敬老会でした。集落の子どもは、赤ちゃんが一人と小学生が三人だけという中で、江戸時代からその地域に伝わっている田植え踊りを、その小学生の三人と地域のお母さん方が懸命に踊って、敬老会に出席したお年寄りの方々を楽しませます。それからみんなで昼食をとり、昔話に花を咲かせ、「こうだったね、ああだったね」と話しながらの敬老会で、大変感動的な敬老会であったわけです。

そこでは、三、四〇人の心と心が触れ合いながら、そしてまた、先ほど京極先生が過去ともきちんと共存し生きているのがいまの遠野だとおっしゃっていました。その田植え踊りなどの地域の伝統を、みんなが守ろうというような気迫が、まさに妖怪がいるんじゃないかと思うぐらいの気迫が伝わってきたわけでありました。

この気迫(といったもの)をきちっと受け止め、これからの町づくりなどにしっかりと取り組んでほしいというのが、今日のこの怪産認定ではなかったのかなと。これを市民の皆さんにもきちんと伝えながら、この賞に恥じない町づくりを、そしてできれば本当に世界遺産を目指すような、そのような町づくりに取り組んで参りたいと思

らがあります。しかし同時に遠野は古くから交通の要所であり、物資豊かな商業地でもありました。村でありながら都市でもあったのです。

「妖怪」は都市で作られ、郷愁の中、つまり田舎に住むものなんです。都市機能と田舎の生活を兼ね備えた遠野は、自分のところで作って、自分のところで育てちゃうようなものなんです。非常に効率よく妖怪文化の保存ができるわけです。

遠野に来て、遠野の風景の中で、遠野の人たちと話していると、その辺が実によくわかるんです。「ああ、ここにいたんだ」

ついているところでもあります。今日は、本当にありがとうございます。

遠野が「怪産」に選ばれたことで、「怪産」の意味がより明確になったとも言えるだろう。今回認定された遠野市、そして第一回に認定された鳥取県境港市、第二回に認定された徳島県三好市山城町とともに、「怪」は今後も怪異・妖怪文化の普及に努めていきたい。

●遠野市に贈られた盾
造形作家・天野行雄氏による作。土佐光信が描いたと言われている百鬼夜行の横長の図柄を、螺旋状に立体化したもの。平面の中では朝日のようなものに追われて逃げるだけのお化けが、過去から未来に向けて飛び出していくというモチーフの盾である。

